

ファイナルファンタ  
ジーX [SS]

水無 亘里

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ファイナルファンタジーXのSS（ショートストーリー）になります。

本編で描かれていない部分を妄想して書くシリーズです。

youtubeで実況しながら気ままに更新していきます。

実況はこちら↓[https://www.youtube.com/playli](https://www.youtube.com/playlist?list=PLD71JQqLaAjmswP70CAFXqKZskK9)

[st?list=PLD71JQqLaAjmswP70CAFXqKZskK9](https://www.youtube.com/playlist?list=PLD71JQqLaAjmswP70CAFXqKZskK9)  
G F O y

# 目次

Chapter 01	「試練前夜」	
1		40
Chapter 02	「来訪者」	5
Chapter 03	「スファイアシュート」	12
Chapter 04	「ワツカカの武器」	19
Chapter 05	「ルールーとぬいぐるみ」	24
Chapter 06	「ルールーとガード」	30
Chapter 07	「スファイア盤」	34
Chapter 08	「アローンの旅路」	



## Chapter 01 「試練前夜」

自分はわがままだ。

私はいつもそう思う。

自分のわがままに他人を巻き込んで、大切な人たちも巻き込んで、迷惑ばかり掛けてしまう。

それならやめればいいのにと、思うこともしよっちゅう。

だけど、私はやめることができない。

なんて、私はわがままなんだろう。

夜のビサイド島は、本当に静かだ。

私は昼のカンカンに照らされる太陽も好きだけど、夜の静かな雰囲気も好き。

こうして涼しい夜風に当たっていると、逸る心を宥めてもらっているような心地がある。

召喚師の装束が風に揺られてカラカラと音を立てる。

まるで、音楽隊が曲を奏でてくれているよう、……なんて言ったら少し大げさかな。

でも、気持ちはそれくらい前向きになる。

ふと油断すると胸の中をいっぱいにしてしまうと恐怖とか焦燥なんて、軽々と吹き飛ばしてくれそうなの、そんな気持ち。

しきたりとか伝統とか、この装束にはいろいろな意味が込められているけど、もしかしたらそんな単純な理由もあったりして。

そう考えると少しだけ。ほんのちよつとだけあったかい気持ちになれる。

ああ、好きだな。私はここが、ピサイド島が大好きだな。

そんなふうに独りごちる。

「ユウナ、こんなところにいた。……眠れないの？」

「……ううん。ちよつと夜風が気持ちよくて……」

少しだけ嘘を吐いた。

本当はあまり寝付けなかった。明日の試練のことを考えると、いろいろなことを思い返してしまって、どうにも落ち着かなかった。

だから、落ち着こうと外に出たんだ。

私は少しだけ、胸が痛んだ。けれど、ルーラーはゆっくり頷いただけだった。

たぶん、言わなくてもバレちゃっているな。

でも、それを指摘したりはしない。

ルーラーはいつも優しい。

ううん、普段は結構厳しいことを言う人だけど、それが彼女の優しさから来る発言だと、今なら充分分かってる。

だから、黙っていてくれることが嬉しい。

ビサイド島は私に優しいし、ルールーも私に優しい。

世界が全部おなじように巡っているとさすがに思わないけれど、この優しさを守りたい。私はそんなふうに思ってしまう。

思えば、私が召喚師になりたいと言ったとき、一番に承諾してくれたのはルールーだった。

召喚師のほとんどがどんなふう旅を終えるのか。

終着点まで辿り着いたとき、どんな結末が待ち受けているか。

それらを考えれば、普通は応援なんてしてくれない。

だって、どれだけ立派で大切な役割だったとしても、その最後には必ずお別れがやってくるから。

だから最初はみんな聞いてくれなかった。

ルールーだって最初はそうだった。

でも、ルールーは私の話をちゃんと聞いてくれた。

最後まで私の気持ちを受け止めてくれた。

そうして、自分がガードを務めるなら——という条件で承諾してくれた。

あるいは言い換えるなら——私のわがままに、巻き込んでしまった。

何が正しいのかわかって、私にはまだわからない。

でも、〈シン〉は倒さなければならぬ。

絶対に倒さなきゃいけない。

私に分かるのは、それだけ。

たとえ、その戦いで命尽きることも、戦うんだって決めたんだ。

みんなが大好きだから。大好きな人たちを、守ろうって決めたんだ。

そのためなら、どんな辛いことだって頑張ろう。

明日のために、今日を生きよう。

〈シン〉のいない世界になって、みんながずっと笑っていられる世界。

そんな世界にしてみせる。

それが私のわがまま。

私が決めた、私の道。

「私、〈シン〉を倒します。……絶対に倒します」

——それは、彼が島を訪れるほんの二日前のことだった。



## Chapter 02 「来訪者」

アーロン。

そいつがザナルカンドに現れたのは、親父が居なくなっただけでしばらくしてからのことだった。

最初は見るからに怪しいやつだと思った。

どこに売っているのか分からないような変な服を着ていたり、誰でも知ってるような当たり前のことを知らなかったり。

そういうえば、初めてブリッツボールの試合を見に来たときは、随分と驚いてたような……。

……と言っても、もともとが口数の少ないやつだ。珍しく感情を露わにしてるってだけで、目に見えて興奮してるって感じじゃなかったけどな。

アーロンが現れたのは親父を追うようにして母さんが死んでわりとすぐの頃だったように思う。

あの時は正直、辛くて苦しくて仕方がなかった。

何度も何度も親父に死んじゃえって思ってきたけど、本当に居なくなっただけは心底怖

なくなったのを覚えている。

違うよな？ 俺が死んじやえって言ったからじやないよな？

親父はちよつと海へ出掛けたつきり、音沙汰なくなつてしまった。

あの人がそう簡単に死ぬわけない。誰もがそう言っていた。

けど、親父はそれから二度と帰つてこなかった。

せいせいした。……そんな気持ちもなかったわけじやない。

だけど、思っていた以上に俺は動揺していたらしい。

親父に比較されて、それでも好きだから続けていたブリッツボールの練習に、身が入つてなかつたんだ。

必死に水を掻いてボールを追いかけても、気づけば何処か遠くを見つめている。

そんな自分がたまらなく情けなかつたし、恥ずかしかつた。

チームメイトに仕方ないよだなんて慰められても、イライラしかなかつた。

それだけじやなかつた。

元々そんなに身体が丈夫じやなかつた母さんも、病気で倒れた。

「だいじょうぶよ。お母さん、すぐに良くなるから」

そう言つた一週間後に、母さんもうなくなつた。

俺には誰もいなくなつた。

俺はいてもたってもいられなくなって、大声で叫んだ。  
大声で泣いた。

全てを奪った海に向かって全力で叫んだ。  
叫んで、泣いて、蹲って、また泣いた。

俺は走って海に飛び込んだ。

死んだって良いと思っただ。

俺にはもう何も無い。

だったらこのまま、いなくなっただって……。

海に潜って、周囲の音が消えてなくなった。

耳に入るのは水の音だけだった。

籠もるような鈍い音の中、泡が水面へ向けて浮かんでゆく。

練習のたびに何度も聞いた音。

俺にとつての日常。

ここは、俺の世界だ――。

俺は水面に上がって息を吸い込んだ。

イライラして仕方なかった。

大っ嫌いな親父は死んだ。大好きな母さんも死んだ。

それでも俺はブリッツボールが好きだ。

ここだけは、なくならなかつたんだ。

俺にはまだ、ブリッツボールがある。

俺にはこれだけがあれば良い。

そう思うと、急に吹っ切れた。

そうだ、なんで親父のために死んでやらなきやならないんだ。

母さんのことは哀しいけど、大っ嫌いな親父の影響で死ぬなんてまっぴらだ。

「大っ嫌いだ!! ……………大っつつつ嫌いだ!!」

叫べば少しだけ、気分が晴れた。

俺は頭を振って陸を目指した。

砂浜に辿り着き、俺は頭を振って髪についた水気を飛ばした。

足を攫おうとするさざ波を掻き分けながら、俺は家へ帰ろうと思っていたんが……。

……………あれ?

「……………オイ?! おっさん、だいじょうぶか?!」

砂浜に打ち上げられている大人がいた。

見たことない服装の知らない人だ。

——その男こそがアローンだった。

少しだけ心配だったんで様子を見に行くと、病院のベッドに寝かされたアーロンはこともあろうにこんなことを言った。

「助けてくれたらしいな、恩に着的。ところで、ジェクトの親族を探しているんだが、知らないか？」

「……おっさん、親父のこと知ってるの？」

そのあと、引き取り手のいない俺を後見人として見守ってくれるようになった——わけだけど。

「なあ、おっさん」

「……アーロンだ」

「なあ、アーロン。あんた何処から来たんだ？」

「ザナルカンドの外からだ」

「なんで親父のこと、知ってたんだ？」

「……頼まれたからだ」

とまあ、そんな具合でホントに必要な最低限しか話さなかった。

まあ、別に親父が過去にアーロンと何していたかなんて興味もないし、聞きたいとも思わない。

ザナルカンドの外のことは気になるけど、アーロンはその辺りにはかなり口が堅くて、手の打ちようがなかった。

それでも親代わりはしたいらしくて、時々細かいことを突っ込んでくる。

俺のブリッツの試合にケチ付けたりさ。

誘っても一向にブリッツやらないくせに文句だけは一人前につけてくるから質が悪い。

一体何考えてんだろうな、この男は。

まあ、どうでもいいけどさ！

それでも、母さんの墓参りにはちゃんと顔を出してくれる。

真面目に手を合わせている以上、この男なりに思うところはあるらしい。

顔も合わせたことないくせに律儀なもんだよな。

まあ、だから一応は親代わりとして認めてやっている。

少なくともこいつはこいつなりにこれでも本気で親代わりを務めようとしているらしいからな。

「……それにしても、昨日の試合は迂闊に攻めすぎだったな。三失点で済んだのは向こうにエース級アタッカーがいなかったからだ。もしジェクト級のアタッカーがいたら十点以上稼がれていたぞ」

「あー！ー！ もー！ー！ うっせえな！！」

やっぱり前言撤回だ。

このおっさん、ロクなもんじゃない！！

## Chapter 03 「スフィアシュート」

親父のことが嫌いだった。

親が有名な所為で、比較されて嫉妬された。

ジュニアクラブで上級生を差し置いてFW（フォワード）に選ばれた時は、露骨に無視されたり嫌がらせを受けたりもした。

ヤツらが言うには親の名前で選ばれたとか何とか。

メチャクチャ腹が立ったのを覚えてる。

だって、これは練習試合の結果から、コーチが選んだ人選じゃないか。

文句があるならコーチに言えば良いのに。

親父なんて関係ない。俺が実力で勝ち取ったんだ。

……そう思ってたんだ。  
だけど。

俺は試合の合間に飲み物を取りに行こうと休憩室へ向かう途中。

廊下で話すコーチの声が聞こえたんだ。

「ああ、ティーダのことか。確かに分かるよ。あいつはまだ荒削りだ。経験も足りてる



とは言えない」

「……なら、どうして?!」

「あいつには素質がある。未来のエースになれる素質が。あのジエクトから受け継いだ天性の才能が……。早めにポテンシャルを引き出しておくのに越したことはない」

「そんな……ッ?! 俺には今年しかないのに! 来年からは俺はユースクラブになるから、もう二度とメンバーになれないかもしれないのに……!」

コーチに涙目になって訴えているのは同じFWポジションの上級生らしい。

公式試合の実績がないと人数が増えるユースクラブでは一軍にはなれないなんて話もあるくらいだ。

だからこそ、みんな必死で練習に打ち込むんだろう。

それは分かる。分かるんだけど……。

「絶対俺のほうがあいつより上手いのに! 得点だって稼いでみせるのに! あいつよりもっと活躍して! 有名選手にだってなつてやるのに!」

その上級生は泣いていた。なりふり構わず不満をぶつけていた。

間違いを糺(ただ)すみたいに。正論を持ち上げるみたいに。

俺はそれを聞いて思わず走り出した。

うわーーーーー!! って叫んで何処までも飛んでいきたかった。

メチャクチャに悔しかったんだ。

俺より得点できるとか、活躍できるとか、有名になれるだとか……。

ふざけるなって思ったんだ。

その上級生にはできない活躍を、俺ならできるんだって、大声で言いたかった。

負けるもんかって、啖呵切ってやりたかった。

その日から俺は猛特訓をしたんだ。

誰にも文句を言わせないくらい上手くなって、僻みとか妬みとか、全部吹っ飛ばせる

くらい強くなりたい。

心の底から、そう思ったんだ。

スフィアシュート。

そう呼ばれる技がある。

頭上にあるボールに背を向けて立って、宙返りをする。

そのままの勢いでボールを蹴り出し、シュートする。

難易度の高い技だ。

この技のメリットは何よりも高いシュート力にある。

足下のボールを蹴るのと比べて、遠心力が掛かる分乗せられる威力が大きくなり、より強い力で得点力の高いシュートを決められる。

これがこの技の一番のメリットだ。

上手く決められれば、ここ一番の切り札として活用できるし、相手の戦意を挫くのに  
だつて有効だ。

ブロックされても球威が死にづらいし、キーパーも受け損ない易い。

勿論でメリットだつてある。

まずは隙がデカイということ。

DF（ディフェンス）に囲まれている状態ではカットされてしまう。

それに一度ボールを視界から外すことになるから、よほどボールのコントロールに自信がなければボールを蹴ること自体できない。

ましてやアクシデントの起きやすい試合中に決めるのは至難の業だ。

普通に考えればできっこない技である。

だから俺はその日から練習時間を更に増やした。

勉強なんてできなくても良い。

ブリッツさけあればそれで良い。

食事と睡眠は動ける分が取れば良い。

それ以外の時間を全て練習に費やした。

ブリッツ以外の全てを俺は捨てたんだ。

そうして迎えた公式試合。

2-3。

俺が二点決めたけど、DFが抜かれて三失点。

俺がボールを奪ったところで、敵DFはゴール前に陣取っていた。

このままヤケクソ気味にシュートを打ったところで弾かれて終わりだ。

俺はボールを持って敵陣に突っ込む。

固まっていたDF二人とMF一人のうち、MFが前へ出てきた。

一人で防げると思ってたやがるのかよ！

俺は悔しくて歯を食い縛った。

近づいてくる敵MF。その寸前、敵が動き出す瞬間を読みきって俺はフェイントを入れた。

予想通り飛び出してきたMFの脇を擦り抜けて、俺は敵陣を前進する。

——まずは一人！

続いてDFが二人、纏まってブロックキングしてくる。

さすがに攻めきれない。

俺はパスしようとして後ろを振り返り、敵FWが前線で味方をブロックしているのを目撃した。

——なんて予想通りだけどな！

俺はボールを真上へと投げた。

見当違いの方向だ。

敵は失笑するみたいに、俺を残念なやつを見るみたいな視線を送ってくる。

ボールは水中から空中へ。

そして、重力に負けてボールは下方へそのベクトルを変える。

その瞬間、俺も水中から空中へ飛び出した！

諦めムードの味方。

嘲笑気味の敵チーム。

俺は、目を瞑ったままボールを感じてた。

目蓋に影が映る。

想定通りの場所にボールが来てる。

まるでボールが自分の身体の一部みたいに感じられて、嬉しさに思わず笑みがこぼれる。

敵チームが慌てる声が聞こえた。

けど、もう遅いよ。

俺は水の抵抗のない強烈な勢いで回転しながらシュートを繰り出す。

足の芯でボールを捉えたのが、感触で分かった。水面に触れても勢いはまるで変わらない。

DFが指を掠らせたようだが、球威は死なない。まっすぐ弾丸のような速度でボールが突き進む。

キーパーは唾然とした顔で棒立ちになっていた。

無力なキーパーなど無視して、シュートがネットを貫いた。カウント、3―3。

あと一点で勝負が決まる。

俺は全力でチームを鼓舞した。

敵チームも慌ててたように立て直しを図っていたが、俺が決めたスフィアシュートの衝撃から立ち直れてはいないようだった。

その日、試合は俺のチームの勝ちだった。

俺はその日からチームのエースと呼ばれるようになった。

上空へ打ち出したボールからのスフィアシュート。

それが、俺の代名詞とも言える技の、初めて披露された試合だった。

## Chapter 04 「ワツカの武器」

それは何度かの魔物を退治した後のことだった。

「へえ〜。お前は剣とか使えるんだな」

言われてティータはワツカの恰好を改めて見直してみる。

ラフな服装は戦闘用というよりかはブリッツのウエアに似ている。

……というよりはそのものというべきだろうか。

正直、戦闘に適した恰好だとは思えない。

もともと、戦闘に相応しい恰好というものがそれほど理解できていくわけでもないのだが。

そもそもが魔物など居ない街中で暮らしていたのだし。

ザナルカンドではよほど沖合にでも行かない限りは、見ることもない存在だったくらいだ。

「俺はなあ、どお〜にも合わなくてなあ」

ワツカは頭を掻きながら恥ずかしい打ち明け話のようにぼやいた。

「結局よう、一番長く続けたこいつが俺には一番合ってるってもんよー」

そう言つてワツカはブリッツボールを掲げた。

確かに魔物へ投げるのを初めて見たときは面食らつたが、威力は申し分ないよう。魔物にはそれなりのダメージを与えているようだった。

少なくとも素人のティーダの剣技と同等以上の威力はあるらしかつた。

考えてみれば当たり前で、ブリッツの投球は水中でも推進力を損なわない程度の球威で投げられるものだ。

これをぶつけて気絶させたり吹き飛ばしたりが当たり前にあるスポーツなのだから、地上でも攻撃として充分に扱える威力がある。

多少の慣れは必要だろうが、ブリッツ選手は全員が戦えるくらいのボールが投げられるということだろうか。

……いや。さすがにそれは考えすぎか。

地上では勝手も違うし、敵を倒しきるにはそれ以外にも工夫が要るはずだ。でなければアーロンも慣れない剣ではなく、ボールを渡していたはずだ。

それはつまり、ただブリッツ選手がボールを持つよりも、剣を持ったほうがまだ戦えるということなのだろう。

まあ、アーロンの行動だけで全てを決めるには早すぎるかもしれないけど……。

「それに剣を見るとどうしてもキツイことを思い出しちまうしなあ……」



「……キツイこと……？」

ティードは首を傾げるが、ワツカはそれには気づかずボールを手のひらの上で跳ねさせる。

ボールは生き物のように跳ね上がる。ワツカはそれを柔らかい肘のクッションで受け止める。

「コツはいろいろとあるんだ。回転を掛ける。魔物のウィークポイントを狙う。それに、スファイア盤もある」

ワツカはボールを一段と高く放り投げる。

それは試合でも見られないようなロングボール。

ボールは強い勢いを伴ったまま、なかなか落ちてこない。

「スファイア盤の装着も許されるなら、全敗なんてことにはならなかったはずなんだが……。まあ、ちよつとズッコイよなあ」

「……うん、ズッコイツスね」

「そツスね」

猛烈な勢いで戻ってきたボールを、ワツカは腕一本で受け止め、余った勢いを回転に変換させると指の上でクルクルと遊ばせる。

ティードもまだ良く理解はしていないのだが、通常スファイア盤は召喚師やガードくら

いにしか支給されないので、一般競技であるブリッツボールでは反則事項に定められているらしい。

まだスファイア盤を成長し切れていないティーダにはその恩恵もほとんどないので、反則だなんて言われるほどののだろうか、少し半信半疑ではあるのだが、少なくとも世の中はそういうふうに出て来ているらしい。

「……それにボールのほうも改善の余地があるんだよなあ。やっぱりオフィシャルボールのままじゃあ、今後は辛いだろうし……」

どうやらワツカにはボールの魔改造の構想もあるらしい。

ティーダとしては複雑な心境である。

そんな新種のボールなら見てみたい気もするし、何処となく神聖なスポーツを汚された気にもなる。

まあ、魔物と戦うためなら手段を選んではいけないのだろうか……。

「それにしても、お前は何処でスファイア盤なんぞ手に入れたんだ？ ガードってわけでもないだろうし……」

「ええ？ いやあ……えつと……」

ティーダは答えに窮してしまう。

使い方はリユククたちに教わったが、もらったのはもつと前だ。

アーンに渡された謎のスファイア。

それがスファイア盤だったなんて、このスピラに来なければ一生知ることもなかっただろう。

「つて悪い。シンの毒気で何も覚えてないんだったな……」

「あ、ああ……。そうなんだ……」

ティータは歯切れの悪い言葉でそう返したのだった。

## Chapter 05 「ルールーとぬいぐるみ」

黒魔法の才能があると聞かされたのはいつのことだっただろうか。

私の物心ついたときの記憶は、臍氣で移ろいやすい幻のような光景だった。

両親にもらったぬいぐるみを魔法で操り、すごいねと褒めてもらったことを覚えてい  
る。

私にとっては遊びの延長でしかなかった。

手を使うよりもっと自由にぬいぐるみを動かしたい。たったそれだけの思いで編  
み出した魔法だった。

そんな平和な日常も、シンの脅威が渦巻くこのスピラでは長く続くものではなかつ  
た。

家族も友達も全てをなくした私には、ぬいぐるみしか残されていなかった。

5才だった私には、ぬいぐるみと魔法以外、何も残されていなかった。

スピラの時間は、弱い者にも容赦なく流れ続ける。

無邪気に笑う生き方を忘れてしまった少女が、ただひとり必死に生きるのは簡単なこ  
とではなく、いろいろな人に助けて貰ったりしながら過ごしていれば、あつという間に

7年の月日が経っていた。

12才になったとき、小さなビサイド村にちよつとしたニュースが流れ込んできた。新たな移住者が現れたのだ。

自分より小さな少女とロンゾ族の少年。

それは、この寂れた村では事件とも言える出来事だった。

最初に目についたのは、やはりロンゾ族の少年、キマリだろう。

ビサイド村ではほとんど見かけることのなかった種族である。

その姿は他の種族と比べて大きく異なる。

青い肌、獣のような雄々しい顔に大きな手。

ロンゾ族の中では小柄な方だそうだが、私から見れば充分に大柄だった。

額に生えた角は折れてはいるが、やはりその存在感も大きい。

口数も少なく、護衛のように少女の隣に佇む姿は、やはり何処か異質だと思った。

少女の名はユウナといった。

彼女はキマリと比べると活発で子供らしい。

子供たちの輪を見つけると必ず飛んできて話に入りたがる。

けれど、上手いもので邪険に扱われるようなことはなかった。

それは彼女の柔らかな表情が成した技なのか。それとも、彼女の外見が取り立てて可愛

かったからか。

そんな様子を大人たちが遠回しに見つめているのに気づいた。

彼らは口々に言う。ブラスカ様の娘だ、大召喚師様の娘だ、と。

それは子供たちだって知らない者はいない名前だった。

シンを倒し、四度目のナギ節をもたらした英雄の名前。……知らないわけがなかった。

大人たちはユウナを特別視した。大人物の娘なのだから、ある意味仕方がなかっただろう。

だが、子供たちは違った。同年代の子供たちだけは、彼女を大召喚師の娘ではなく、ひとりの女の子として扱った。

いつしか彼女もそれを区別するようになっていった。

大人たちに対しては召喚師の娘として礼儀正しい対応を。

子供たちに対しては年頃の娘としての姿を見せるようになった。

村人であつた私や同じく同郷で育つたワツカやチャップとも親しくなつた。

そんな生活を過ごすうち、時折ユウナは思い詰めたような表情をしていた。

『召喚師になりたい』

そんな言葉を口にしたのはほんの2年前のこと。

けれど、ユウナのことだ。その決意はもつと前に固められていたのだろう。ワツカが情で訴えた。

私も理屈で止めようとした。

でも、あの子は頑固だった。何度説得を試みても、彼女は一步も引かなかった。

ワツカはわりとすぐに折れた。

周囲の大人もあまり説得はしていなかった。

いや、大人はみんな口では心配だと言いつつも心の何処かでは期待していたに違いない。

大召喚師ブラスカの娘なのだ。期待しないわけがない。

ならば、彼女は村のみんなのために召喚師を目指したのか。

……それもあるだろう。だが、彼女の本心はそうじゃない。

少なくとも、それだけが理由ではない。

あの子はそこまでバカではない。その程度のこととはもう分かっていた。

それくらいの時間を既に共有していた。

ユウナと長い時間話をした。

あの子の気持ちは分かった。

あの子はそう。いつだって誰かのために頑張ろうとする。

その結果がどんな結末なのかも分かった上で、その旅がどれほど過酷なのかも分かった上で。

それでも止まらない。

一度決めたらテコでも動かない。あの子は昔からそうだった。

キマリもそれを止めない。キマリは全てをユウナの意思に優先させている。

だから止めない。彼はそういう人物だ。

ならばどうする？ 自分には何が出来る？

ユウナを死なせないために、私には何が出来る？

成長につれ、黒魔術の技量はそれなりに上がっている。

村の近辺の魔物なら手こずることはないし、下手な討伐隊の戦士よりも戦える自信はある。

それならば、手はある。

ひとつだけ、ある。

ユウナが旅に出るよりも先に、ナギ節が来れば良い。

私がガードになって、召喚師の旅を完遂する。

それでユウナは助けられる。

召喚師にならなくても良くなる。



私の腕の中で、モーグリ人形が頷く。

それが自分の魔力が動かしたものだとしても、私はこの魔力に勇気づけられる。  
ユウナを召喚師にはさせない。

そのためなら、私は何にだってなれる。

## Chapter 06 「ルールーとガード」

異界送り。

キーリカへと辿り着いた一行はシンの脅威を目の当たりにしていた。

凄惨な光景。破壊の痕跡。

救いのない絶望。無力に打ちひしがれる人々。

異界送りを舞うユウナを見据えながら、ルールーは過去を思い返していた。

これは三度目の旅になるが、一度目の旅で迎えた結末。

やり場のない想い。

果たして、あの方は今、無事に異界へと旅立てたのだろうか。

それとも、いまだにあそこで迷い続けているのだろうか。

幻想的な光景に目を奪われながらも、思い出すのは後悔ばかり。

——私は強くなれた。強くなつた。今度は大丈夫。今度こそは大丈夫……。

できるできないではない。やるしかないのだ。

本当に守りたいものが、今は目の前にあるのだから。

——もう二度と、あの時のようには——。

……死は、いつだつて唐突に訪れるものだ。

黒魔導士としての戦いは、ほとんど召喚師のギンネム様からご指導いただいたものだ。

戦いにおけるプロ意識などや立ち居振る舞いに至るまで、あの方から多くのものをいただいた。

あの頃の自分はまだ駆け出しに過ぎなかった。今のルールはそう思う。

多くの技術を自分のものにしたルールだったが、あの方に追いつけているかと言われると、いまだに領けない。

——黒魔導士らしい服装を心がけるようになったのもあの頃だったっけ……。

理由はいくつかある。

ひとつは一人前の黒魔導士としてアピールすることで周囲に分かり易くガードとしてアピールすること。

ふたつ目は自分は一人前の黒魔導士であると自分自身に戒めること。

周りにアピールすることは自己顕示欲が高いみたいには思われるのではないかと思っていたのだが、それ以外のメリットもあつた。

それは一流のガードがいる召喚師であると主張できることだ。

召喚師に迫る危険はそれなりに多い。

召喚師を襲うのは魔物だけではない。荒くれ者やアルベド族なども牙を剥くときがあるのだ。

理由は知れない。だが、彼らに対する抑止力となるのであれば、矢面に立つのも重要だと思うのだった。

それに、ルールーにとってはふたつ目も大切だった。

時折、首をもたげる迷いや自信のなさを、振り切るための強さになる。

こんな恰好をして、惨めな姿を見せられない。

そう思えることもメリツトだった。

——それ以前に、常に黒魔法を応用していないと、この服ではまともに生活が送れないというのもあるけれど……。

慣れないうちは裾を汚したり、汗を掻いたりしたものだ、それも今となっては懐かしい。

土魔法を応用して裾と地面の摩擦をゼロにしたり、空気を適温に変更して流動させることは、もはや息を吸うように自然にできるようになった。

これも全てはギンネム様のお陰だろう。

——聞こえますか、ギンネム様。私は三度目の旅に出ます。今度こそ、成功させる。

もう二度と、間違いはしない……。だからせめて、この旅を見守っててください……。  
ルールーは祈るように幻光虫の向こうを見据えていた。

## Chapter 07 「スフィア盤」

「溜め込んだ経験を持ち主の力に返るもの、……それがスフィア盤だ」

ザナルカンドにいた頃、アーロンはティーダ宅に来ていた。

差し出したのは、スフィア。

スフィアは様々な機能を込められるアイテムだ。

何やら高尚なアイテムらしくて、ティーダにはその原理など欠片も理解できてはいないのだが……。

アーロンはティーダにスフィア盤を渡しながら、そんなふうに説明をした。

経験？ 溜め込む？

——正直、何がどうやらって感じだった。

ブリッツにどれだけ打ち込んでも、スフィア盤には経験が溜め込まれたようには見えない。

——そういえば、強化にはスフィアを詰め込むとか言ってたっけ？

詰め込むと言われても、とティーダは首を傾げた。

スフィア盤というのは手のひらに乗るような小さなスフィアだ。

握り込んで起動させると盤面のような映像が中空に映し出される。

数値は……いまだゼロ。

始点から微動だにしていない。

詰め込む、というのはこの空白に詰め込むのだろうか。

とはいえ、どうやって？

疑問は尽きなかった。

アールロンに再度訊くと、魔物との戦いが経験として刻まれるらしい。

そんな機会、いつ来るんだよ。ティーダは呆れながらぼやいた。

——来るわけないだろ、そんな日。

しかし、それから一月も経過しないうちに、そんな日は訪れてしまうのだった。

アルベド族のサルベージ船で、リュックは感心した声を上げる。

「へえ〜。君ってスフィア盤持つてるんだ。なんか意外かも！」

「ええ?! そうなのか……? いや、俺も良く分からないんだけどさ。なんか変なやつに渡されたんだ」

リュックはけらけらと笑っていた。

どうにもスフィア盤というのは希少なものらしく、普通はそうそう人に渡したりはし

ないものらしい。

——そんなものを軽々と渡すなんて、アローンのやつ何考えてるんだ？

常日頃沸き上がるあの怪しげな男への何度目かも分からない不信感が首をもたげていた。

とはいえ、それでも結局は信じてしまう辺り、ティーダは純真だったのかもしれない。あるいは、アローンのティーダやジエクトへの真摯な態度が、そうさせたのかもしれないが……。

「でも、そのおかしな人に感謝だね。普通は魔物一匹でも手強いんだからさー！」  
確かにそうかもしれない。

ここに来るまで何度も戦いの機会があった。

剣がなければ、スフィア盤がなければ、ここまで生き延びることはできなかつたかもしれない。

……感謝すべきなのかもしれない。

——……けど、なんか素直にありがたいて思えないんだよなあ……。

ティーダはどこことなく居心地が悪くなって、頭をガシガシと搔いた。

——ビサイドでワツカと会ったときも、剣を褒めて貰えたっけ……？



「ほお、あのスピードについてこれるか！」

ワツカもティードヤリユックと同じく、スファイア盤を持つていた。

この頃になると経験が溜まって、スファイアを詰め込む回数も増えてきた。

スファイア盤にスファイアを詰め込む度に、ほんの少しだけ攻撃の威力が上がり、身体が軽くなったように感じられる。

成長を実感できるというのは凄いのだが、同時に違和感も拭いきれない。

「なあ、ワツカ。これってどういう仕組みで強くなれるんだ？」

「それはなあ……」

ワツカは難しい顔で空を仰いだ。

「昔な、えらくい学者さんが研究したそうだ。スファイア盤がどういう働きを持っていて、人体にどういう効果をもたらすかってな」

神妙な顔つきで、ワツカは顎をさする。

「結論を言えば、俺たち自身が強くなってるわけじゃないんだと。スファイア盤そのものに支えられて俺たちは強くなってる。だから、スファイア盤との接続が切れれば俺たちは素人に戻っちゃうそうなんだ」

考えてみれば、その通りかも知れない。こんなふうには戦えるのは、やはり特別なことなんだ。

スフィア盤がなくなれば、ティードたちにはなんの特別な力もない。

ただ、少しブリッツが上手いだけの少年でしかないだろう。

しかし、ワツカは俯いて声を落とした。

「けどな、不思議な話なんだけだよ。このスフィア盤、一度装備するとな。二度と接続が切れないらしいんだよ」

「は？」

ティードは思わず、素つ頓狂な声を上げてしまう。

「いやな、スフィア盤を手元から放したとしても、俺たちは弱くならないんだよ。身体能力は何も変わらない。勿論強化はできないがな。ついにはそのえらい学者さんも接続の切り方が分からなかったらしい」

「……なんか、ちよつとしたホラーツスね」

「そツスね」

そんなことを話して、ティードたちは道を急ぐことにしたのだった。

キーリカへと向かう階段の途中。

ティードはスフィア盤に関するそんな記憶を思い返していた。

ユウナのガードになる。

そうなれば、こうしてスフィア盤を使いこなして先へ進むことになるのだろう。

元の世界へ帰る。その思いとは異なる道となる。

回り道と言っても良い。

けど、ルカへ行つたところで、きつと知り合いなどいないだろう。そんなことは自分が一番良く分かっている。

だったら、それまで……。いや、それから……。

ルカに一人取り残されたら……。そう考えると、少し怖くなった。

だったら、ガードになるのも悪くない……。かも。

少しだけ、そんなふうに思うティードだった。

## Chapter 08 「アーロンの旅路」

ザナルカンドを、シンが襲った。

それはアーロンにとっても想定外のことだった。

このままジエクトの忘れ形見を見守っていれば、それで良いと思っていた。

それこそが自分の役割だと、そう考えていた。

残された時間はそう使うべきなのだ、そう思っていた。

幼いユウナはロンゾ族の青年に託してきた。

キマリは信頼できる人物だ。短い付き合いだが、そう確信していた。

だからこそ、アーロンはティーダを探した。

シンに乗ってザナルカンドへ向かうというのも、生身の身体では不可能だっただろう。

思えば、遠くへ来たものだ。アーロンは自嘲気味に思う。

ジエクトとブラスカとアーロン、三人で旅をしたことは偶然だった。

アルベド族を嫁に貰った召喚師。

ザナルカンドから来たと自称する謎の旅人。

出世の道を経たれた僧兵。

奇妙な組み合わせの旅路には、きつと何らかの意味があった。

ジエクトが究極召喚になったことも、ブラスカが究極召喚を使って死んだことも、無意味であつたとは思いたくない。

だが、そんな取り合わせでつたからこそ、今の奇妙な偶然は起こっている。

この三人でなかつたなら、最期の戦いを挑むことはなかつた。

その最期の戦いがなければ、キマリと出会うこともなかつた。

キマリに会わなければユウナを託すこともなかつた。

死人にならなければ、ザナルカンドへ向かうことなどできなかつた。

そこでティータに出会うこともなかつただろう。

この状況は数奇な運命に導かれて、形作られている。

もしそうであるならば……。

アーンは黙考せざるを得ない。

自分に与えられた役割は何か。

その答えは明白なほど分かりきっている。

それは、過酷な道だろう。

過酷な選択を強いることになる。

かつての自分たちと同じように。

もう一度、世界をそのものと対峙することになる。

彼らはその重さを抱えきれぬのだろうか。

また、自分たちと同じ選択をすることになるのではなからうか。

不安は消えない。

だが、それでも。

答えは彼らが出さなければならぬ。

何故ならアーロンは既に、生ある存在ではないのだから。

この仮初めの命に意味があるとすれば、それは導き手としての役割だろう。

彼らを終末まで導き、選択を委ねる。

それこそが自分のやるべきことだ。

アーロンは、懐かしきスピラの水平線を見据えて目を細める。

生存は絶望的な状況ではあるが、あのジェクトの息子だ。

悪運の強さは折り紙付きと言えよう。

それにあのジェクトだ。

シンになろうとも、破壊の権化に成り下がろうとも、無為に息子を死なせたりはすま

い。

ティーダは生きている。

生きてスピラに辿り着いているはずだ。

きつと口を開けば不満や文句を挙げるだろうが、あいつもそこまで馬鹿ではない。すぐに気づくはずだ。

この世界の闇の存在に。

そして……。

アーロンは顔を上げる。

巨大な広告スフィアに映し出される映像は、ブリッツボールの大会のものだ。

「これだけの餌があれば、簡単に釣れるだろう。なにせ、お前の息子だからな」

アーロンは襟の内側で笑みを浮かべた。

今は亡き友が肩を竦めるような姿が目蓋の裏に思い浮かんだ。

そして、ティーダとの再会はその僅か三日後のことだった。